

「苗」研究のエントリーシート

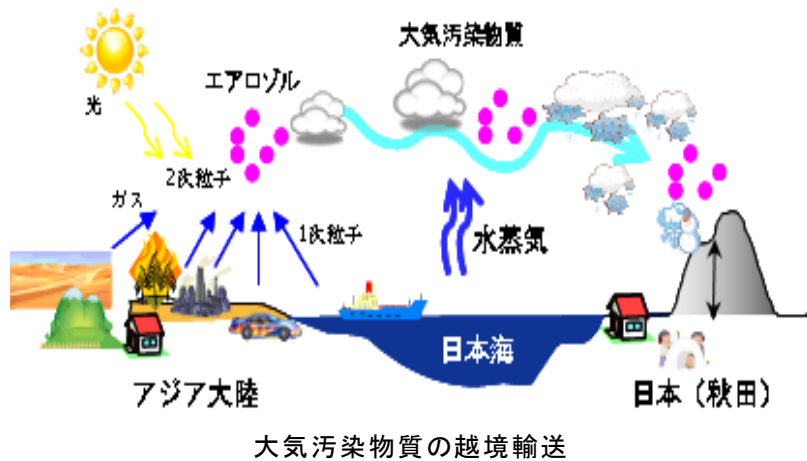
研究テーマ	山岳地における多環芳香族炭化水素類の動態に関する研究		
研究代表者	木口 倫	役職	准教授
フリガナ	キグチ オサム	学位	博士(工学)
学科等	生物環境科学科	Eメール	o.kiguchi00120@akita-pu.ac.jp
主な共同研究者 (学内)			
主な共同研究者 (学外)	小林貴司 (秋田県健康環境センター)		

研究の内容

日本の国土の約7割を占める山岳地は、平地とは異なる大気環境下に晒され環境変動に極めて脆弱であるといわれている。そのような山岳地の自然環境の形成には大気質が深く関わっているといわれている。

近年、中国国内で暖房や工場・発電所等の石炭燃焼に伴って大量に発生する硫黄酸化物が自国内で大きな都市公害を引き起こしているばかりか、その越境輸送による酸性雨や酸性雪がゴビ砂漠由来の黄砂とともに日本国内の広い範囲で観測されている。これらの影響は北西季節風が卓越する冬季から春季に日本海沿岸各地で強まることが知られている。

本研究では、有害大気汚染物質として多環芳香族炭化水素類(PAHs)やその誘導体に着目し、これらの化合物群が冬季から春季にかけてアジア大陸から越境輸送され、山岳地の積雪中にその汚染が有意に存在するのか、存在するならば山岳地の自然環境や水循環とどのような関わりもち、どのような影響があるのかどうかを明らかにするため、山岳地の積雪中のPAHsに関する研究に取り組んでいる。



研究の独自性・アピール点

山岳地の積雪中に存在する PAHs やその分解物の種類、濃度、組成、由来等を明らかにするとともに、山岳環境中での PAHs のゆくえ（物質循環や水循環との関わり）を探る。

期待される成果・波及効果

山岳地は河川流域の源であり、その自然の植生である森林には水源の涵養機能や生物多様性が維持されている。また、水の移動を通して源流から海に至るまで地域の水環境は連続しており、山岳地に影響を及ぼす越境汚染や地域の人為汚染の度合いを明らかにすることで、源流域だけでなく、流域の水環境保全やその管理に寄与する情報が得られると考えられる。

関連する主な業績

水循環、物質循環、流出、山岳環境、源流域、生態影響